

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 神谷 訓康

論 文 題 目

Risk factors for disability progression among Japanese long-term care service users –A 3-year prospective cohort study.

(要支援および要介護者の重度化リスク因子の探索に関する研究  
—前向きコホート研究)

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	近藤 高明
	名古屋大学教授	玉腰 浩司
	名古屋大学教授	山田 純生

## 論文審査の結果の要旨

介護サービスを効率的かつ効果的に提供するためには、介護度重度化のリスク因子を対象をスクリーニングし、改善策を講じることが必要である。介護サービス利用者を対象とする先行研究では、性別、家族構成、経済状況などの因子が重度化のリスク因子として挙げられてきたが、心身機能など介入標的となるような因子について十分検討されていなかった。したがって本研究では、軽度要介護者を対象とし、介護度重度化のリスク因子探索を目的とした。

要支援～要介護 2 に認定され、ホームヘルプサービスを利用している 417 名を対象として 3 年間の追跡調査を実施した。

研究 1 では、ベースライン調査から、対象者の特性を描出するとともに、横断的に介護度別の比較をすることで、リスク因子の候補を検討した。得られた知見の要点は以下のとおりである。

1. 握力、下腿周囲長、日常生活の困難感、社会参加、抑うつが介護度重度化のリスク因子の候補と考えられた。
2. 軽度要介護者において記憶能力低下者が 25%以上存在し、質問紙によるスクリーニングは信頼性が損なわれる可能性が高い。

研究 2 では、3 年間の追跡調査の結果から、介護度重度化のリスク因子を検討した。主要アウトカムである要介護 3 以上の認定および公的介護施設への入所者は 106 名 (25.4%) であった。得られた知見の要点は以下のとおりである。

3. 介護度重度化のリスク因子は、ベースライン時の介護度、癌の既往、記憶能力低値、握力低値であると考えられた。
4. 握力は癌をモデルに投入したときに主要アウトカムと関連する傾向がみられたことより、重度化リスクの把握には既往歴、握力をともに評価し、総合的に判断する必要があることが示唆された。

本研究は、介護領域において重度化リスクの高い対象を選び出すスクリーニング項目ならびに予測モデルを示す重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（リハビリテーション療法学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。